

今年いちばんの出会いを、劇場で。

フェニーチエ堺

FENICE SACAY

©Peter Rigard c/o shotview Artists



©S.Ohsugi

巻頭特集

堺で味わう有名オーケストラ!

日本×ドイツ×イギリス ～素敵なクラシック小旅行～

2022
vol.18



巻頭特集

堺で味わう有名オーケストラ!

日本×ドイツ×イギリス ～素敵なクラシック小旅行～

毎年、国内外から著名なオーケストラがやってくるフェニーチェ堺大ホール。

今年の堺をあざやかに彩ってくれるのは、日本・ドイツ・イギリスで活躍するスペシャルな音楽家たちです。

日本を代表する指揮者の佐渡裕を皮切りに、ヨーロッパで注目を集める名匠アンドリュウ・マンゼ、

イギリスが誇る大指揮者サー・サイモン・ラトル。

ソリストには昨年のショパン国際ピアノコンクールで快挙を成し遂げた反田恭平、

ドイツ・ピアノズムの正統継承者として名高いゲルハルト・オピッツ。

巨匠・小澤征爾が生んだオーケストラ「新日本フィル」に、

楽聖ベートーヴェン生誕の地ドイツで確かな演奏に定評のある「NDR北ドイツ放送フィル」、

世界の有力オーケストラに名を連ねる「ロンドン響」。

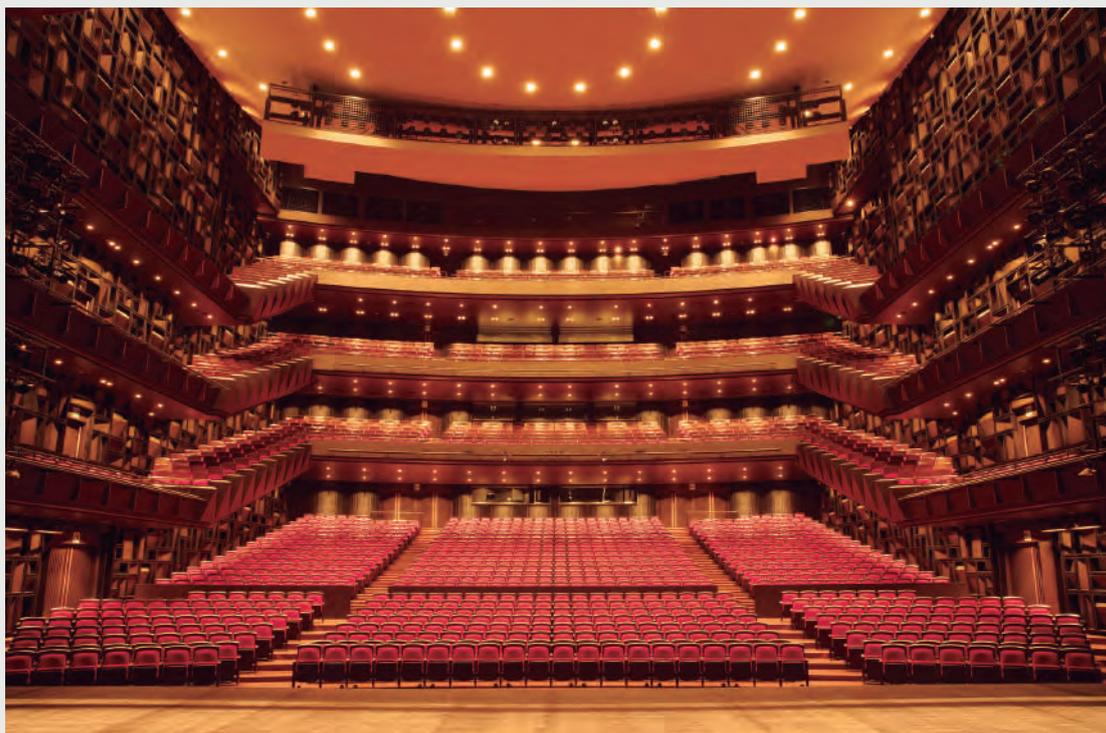
さあ、ユーラシア大陸をひとつ飛びする音楽の旅にでかけましょう!

インタビュー: 崔 文洙(新日本フィル)、ゲルハルト・オピッツ(ピアニスト)



©Concerto Winderstein

*Classical music
with a nice trip*



佐渡裕 指揮/反田恭平 ピアノ 新日本フィルハーモニー交響楽団

2022年に創立50周年を迎えた新日本フィルハーモニー交響楽団。世界的指揮者の小澤征爾を中心に設立され、東京都墨田区の「すみだトリフォニーホール」を拠点とする同楽団は、初代の音楽監督に当時20代前半の小泉和裕を、第3代音楽監督に30歳をいくつか越えたばかりのクリスティアン・アルミンクを起用するなど、若い才能にチャンスを与えてチャレンジングな音作りをしてきました。50周年を記念して実施したクラウドファンディングでは目標金額の500万円を大きく上回る約800万円の支援を受け、ベートーヴェンの全交響曲集をCDリリース。熱心なファンに支えられ続けています。

■ 新日本フィル&指揮者・佐渡裕

4月にミュージックアドバイザーに就任し、6月の堺公演で指揮棒を振る佐渡裕とは何度も共演を重ねてきた間柄。2023年からは音楽監督に就くことが決まっています。振り返れば、1989年ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝した若き日の佐渡裕が凱旋後にプロデビューを果たしたのが新日本フィルであり、演奏曲は今回のプログラムにあるベートーヴェン『交響曲 第7番』でした。「佐渡さんはテレビのイメージ通りに気さくでお茶目なですよ」と、新日本フィルで長くソロ・コンサートマスターを務めるヴァイオリニストの崔文洙(チェムンス)氏。人を惹きつけてやまない佐渡裕との新たなパートナーシップに目を輝かせました。「僕の憧れで大恩人の小澤征爾先生が作ったオーケストラとがっちり手を組むことに気合いが入っています」と語る佐渡裕とのマリアージュに期待が高まります。

■ 佐渡裕&ピアニスト・反田恭平

佐渡裕が今回のソリストに指名したのが、昨年の第18回シヨパン国際ピアノコンクールで日本人として歴代最高位タイの2位に51年ぶりに輝き話題を集めた、ピアニストの反田恭平。国内外でいくども共演し成功を収めてきた2人の信頼関係はゆるぎないものです。本年1月にもこの名コンビと東京でベートーヴェン『皇帝』

を演奏した新日本フィル。人気実力ともにトップクラスの指揮者/ピアニストと「色んなものを出し合い、チャレンジしていかなくてはという発展が生まれるのか、とても楽しみです」と、これからの公演に向けて崔氏が意欲をのぞかせました。

■ ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第5番「皇帝」&交響曲第7番

「まるでステーキとお寿司と一緒に食べるような」と、今回のプログラムの豪華さをユーモラスにたとえた崔氏。「どちらもきっとどこかで聴いたことがある曲で、佐渡さんと反田さんも観客の視点で考えることのできる音楽家だから、演奏会が初めての方でも楽しんでもらえると思います。電気ではなく空気を通して聴く生の演奏は格別で、オーケストラの息遣いを感じながら、音楽が心と体に入ってくる感覚を味わってもらえたら嬉しいです」と、話してくれました。堺に初登場となる新日本フィル。佐渡裕×反田恭平という日本屈指の才能とともに、最高のベートーヴェンを響かせてくれることでしょう。

6/1(水) 19:00 大ホール

大和証券グループ Presents

佐渡裕(指揮)/反田恭平(ピアノ)

新日本フィルハーモニー交響楽団50周年記念演奏会

チケット発売日:4月9日(土)



©Peter Rigard c/o shotview Artists

©S.Ohsugi



©K.Miura

アンドリュー・マンゼ 指揮/ゲルハルト・オピッツ ピアノ NDR北ドイツ放送 フィルハーモニー交響楽団

ゲルハルト・オピッツ プロフィール

1953年西ドイツのフラウエンアウに生まれる。5歳からピアノを始め、11歳でコンサートデビュー。1977年に第2回ルービンシュタイン国際ピアノコンクールで優勝。世界各国で活躍し、これまでの演奏会の通算回数は2,575回にのぼる(2022年2月現在)。演奏会が無いときは山や森など自然の中で散歩をしたり、オペラからシンフォニックなものまで色々な音楽を勉強する時間をとっている。



©HT/PCM

■ ゲルハルト・オピッツ特別インタビュー

——NDR北ドイツ放送フィルとの共演について

1977年に『ベートーヴェントリプルコンチェルト』で共演し、次に1991年、92年と2度ブラームスのピアノコンチェルト第1番を弾きました。リハーサルも本番もとても良かった印象が残っています。ただ、そこから30年近く経っているので、メンバーも変わり若い世代がどんな音作りをしているのか、今から私も楽しみです。ラジオから流れてくる音はエクセレントでしたよ。

——指揮者アンドリュウ・マンゼについて

彼はヴァイオリニストとしても古楽の演奏に長けた人です。バロックなどの古楽奏法を非常に熱心に研究している人。まだ一緒に演奏をしたことはないけれど、良い意味で“サプライズ”になるのではないかと考えています。彼は指揮者としても古典の時期の作品に情熱を傾けています。そういう意味ではベートーヴェンもその中に入るので、共演はおもしろくなりそうですね。

——ベートーヴェン ピアノ協奏曲第5番「皇帝」について

今まで5番は250回くらい演奏をしています。私の心に近い作品で、心から愛しく思っています。スコアが一緒でも色んな要素で音は変わりますし、今回の指揮者とオーケストラとの共演は良い意味で驚きがいっぱいあるでしょう。5番は解釈の余地が広くあり、可能性が限りなくある作品です。そして何より大切なことは、聴衆の皆さまに説得力のある演奏を聴いてもらえるかどうか、心に響く演奏であるかどうかです。

——堺での演奏について

堺へは初来日の時に訪れました。23歳のときです。1976年頃でしょうか。まだ演奏した曲目も覚えていますよ。ハイドンのソナタ52番、ベートーヴェン111番、リストソナタを弾いたことを覚えています。関西での演奏は多いですが、それ以降は堺を再訪したことはありません。今回は2回目の堺訪問で、評判がとても良いと聞いている新しいホールで演奏させてもらえることは大きな喜びであり、光栄です。オーケストラとの再会も堺との再会も楽しみです。その頃には今の状況がより良くなっていることを願っています。

——お客様へのメッセージをお願いします

来てくださるお客様の魂(心)に届き、楽しむことができる演奏をしたいと思っています。ベートーヴェンは聴衆に新たなインスピレーション、あるいは精神的に高揚感を与えてくれる音楽です。悲しみや日々の問題を抱えた状態の方も多くいらっしゃると思いますが、皆さんのそういったものを越えた感情を味わえるのが音楽の素晴らしいさではないでしょうか。文化や音楽は、人生を生きる価値のあるものにしてくれる。生きる意味を与えてくれる。ただ生きているだけ、毎日同じ繰り返しをしているだけでは得られない充実感を、音楽は与えてくれる。人生を豊かにしてくれるのも音楽だと思います。

11/20(日) 時間未定 大ホール

NDR北ドイツ放送 フィルハーモニー交響楽団

指揮: アンドリュウ・マンゼ

ピアノ: ゲルハルト・オピッツ

曲目: ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第5番「皇帝」ほか

チケット発売日未定

©Axel Herzig, NDR



サー・サイモン・ラトル 指揮/ロンドン交響楽団

来日公演ラストツアー

名誉総裁にエリザベス女王を戴き、「女王陛下のオーケストラ」として知られるロンドン交響楽団。世界最初期の自主運営オーケストラとして1904年に発足して以来、ロンドンおよび英国オーケストラの中心的存在として、いまでも足跡を刻み続けています。指揮者のサー・サイモン・ラトルもまた世界屈指的存在で、約16年にわたってベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者と芸術監督を務めたあと、2017年にロンドン響の音楽監督に就任しました。今回の来日公演は、そのラトルとロンドン響にとってのラストツアーとなり、並々ならぬ意気込みが伝わってきています。本公演については次回の特集で詳しく取り上げる予定ですので、楽しみにお待ちください。

10/1(土) 16:00 大ホール

ロンドン交響楽団 サー・サイモン・ラトル指揮

詳細未定

©Oliver Helbig



Classical music
with a nice trip

桐

ふれる堺。

三好長慶



堺を重要拠点とし活躍した、今年生誕500年の三好長慶。將軍を追放し、畿内を支配する「天下人」となり、織田信長に大きな衝撃と影響を与えた武将の人間像を、三好一族研究の第一人者、天理大学准教授の天野忠幸先生に伺いました。

三好長慶はどのような人物だったと思われますか？

彼の性格は分からないことが多いですが、連歌が大好き、しかもプロ級で多くの歌を残しています。そうした和歌から性格を読み取ると、まず素直でとても品が良い。慎重で熟考するタイプですが、下した決断は大胆不敵です。首都京都と当時「天下」と呼ばれた畿内を、足利將軍家を擁立せず支配する、という誰も考えつかないことを実行に移すなど、果敢^{かたん}*1な一面もある人です。

※1 果敢 ためらわずに思い切っていること。その態度。

当時周囲の人から、どのような人として見られていましたか？

三好家は元々阿波(徳島)の出身で、阿波衆は戦が強いと評判でした。当時は、家柄が重要とされる社会でしたが、三好氏は阿波守護(徳島県知事)の細川氏の家臣に過ぎませんでした。しかし、長慶は家柄をものともせず、日本全国六十六ヶ国のうち、十三ヶ国を治めるまで勢力を拡大させます。尊敬する人もいれば、やっかむ人もいました。しかし、長慶の死後に描かれた肖像画には、「北極星のように世の中の指針となる人」だったと書き残されるほど、賞賛されています。

長慶は、將軍足利義輝を近江に追放し、後奈良天皇や正親町天皇の良き相談相手となりました。將軍と同格の「從四位下」という官位も与えられましたが、長慶は若い頃から天下を取るつもりで動いていたと思いますか？

私達は、戦国時代はすべての武将が全国統一を目指して戦っていた、というイメージを持っています。しかし、最近分かってきたのは、近隣の数ヶ国を制圧するという戦争はしていましたが、室町幕府を滅ぼし全国統一まで考えていた武将はいなかったということです。そうした中で、長慶は首都の静謐^{せいひつ}*2を一番に心がけていました。応仁の乱以来、機能不全に陥っていた幕府の再興を目指します。ところが將軍足利義輝はそんな

長慶を疎ましく思い、暗殺を何度も企て、戦いを挑みます。長慶は報復せず、將軍として職務を果たすよう諫めましたが、事態は変わりません。そこで、長慶が義輝を追放し、將軍の仕事を代行していくうちに、支配者としての自覚が徐々に芽生えていく。畿内の人々も、將軍なしで三好家が世を治められることに気づいていくという感じです。

※2 静謐 世の中が穏やかに治まること。太平。

信長や秀吉のような賛沢をしたエピソードや破天荒な逸話はありますか？

残念ながらどちらもありません。弟の三好実休は、茶の湯もしますし、有名な刀剣のコレクターでした。長慶は愛好する連歌では、武士だけでなく、町人や僧侶など様々な階層の人と交わって楽しんだようですが、茶会はあまりしなかったようです。小説や漫画の主人公には、派手な逸話や破天荒なエピソードが必要ですが、それがないので見栄えがせず、なかなか取り上げてもらえないですね(笑)。



天野忠幸

一九七六年、神戸市生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了、博士(文学)。二〇一六年より天理大学文学部准教授。著書に「戦国期三好政権の研究」(清文堂出版)、「三好長慶」(ミネルヴァ書房)、「三好一族と織田信長」(戎光祥出版)、「松永久秀と下剋上」(平凡社)、「室町幕府分裂と畿内近国の胎動」(吉川弘文館)などがある。

長慶は病死したとされていますが、死因は判明していますか？

精神を患って亡くなった、と語られることもありますが、正確なことはわかりません。有吉佐和子さんが認知症をテーマとした小説『恍惚の人』を執筆しましたが、このタイトルは、江戸時代末期に頼山陽という国学者が『日本外史』の中で、長慶は「老いて病み恍惚として人を知らず」と評したことから採られたとされています。有吉さんの小説が大ヒットしたことで、長慶はそうイメージされるようになったのです。しかし、戦国時代の古文書や古記録では、何の病気があったかはわかりません。実際に亡くなる一、二週間前には、キリスト教の宣教師に布教を認めるなど、重要な決断を下しています。

長慶は堺の街と人をどのように捉え、影響を与えましたか？

長慶は城下町のような一極集中型の都市を作ることはせず、政治の拠点は京都に近い芥川城(高槻市)や飯盛城(大東市、四條畷市)に置く一方、経済や文化の重要拠点として堺を重視し、商人や僧侶など民間の力をうまく活用し統治しました。その堺の代表者である会合衆は、自治組織で武士の支配をうけなかった、とよく言われていますが、実際は今でいう経団連のような団体で、長慶とは蜜月関係にあり、共存共栄していたようです。長慶は堺の発展を考え、民間貿易の振興をはかり、海外と交流のある商人を保護しました。



また三好家は堺に複数の寺院を建立し、それらと深い関係を持っていました。長慶が父・元長を供養するために建てた南宗寺。弟・実休を弔うために会合衆の油屋家が建てた妙国寺。長慶のライバルであった三好政長を祀った善長寺。特に、自害した元長を最後まで守ってくれた願本寺には恩義を感じ、手厚く保護しました。堺の寺は、ほとんど町人が建立したもので、他の武将が建てた寺がないことから、堺と三好氏の繋がりが深いことがうかがえます。



三好長慶年表

長慶は数々の偉業をなしたとけたにも関わらず、歴史の陰に隠れてきましたが、近年天野先生の研究などから徐々に人気と注目を集めています。関西には多くの長慶の足跡が残っていますので、書物を片手に長慶の人生を巡るお散歩を楽しんではいかがでしょうか。

1571年	1566年	1563年	1562年	1561年	1560年	1558年	1557年	1556年	1555年	1553年	1549年	1539年	1533年	1532年	1522年
	43歳	42歳	41歳	40歳	39歳	37歳	36歳	35歳	32歳	28歳	18歳	12歳	11歳	1歳	
南宗寺で七回忌を行う	三好実休を弔うため、堺に妙国寺が建立される	大徳寺聚光院(京都市)の建立が始まる	真観寺(八尾市)で長慶の葬礼が営まれる	飯盛城で病死する	一人息子の義興が病死する	教興寺(八尾市)の戦いで畠山高政に勝利する	阿波や河内南部を拠点としていた弟の三好実休が戦死する	讃岐や和泉を拠点としていた弟の十河一存が病死する	芥川城(高槻市)を息子の義興に任せる	將軍より桐の御紋の使用を許可される	講岐や和泉を拠点としていた弟の三好実休が戦死する	阿波や河内南部を拠点としていた弟の三好実休が戦死する	一人息子の義興が病死する	飯盛城で病死する	真観寺(八尾市)で長慶の葬礼が営まれる

『三好一族』(中公新書)

阿波の守護細川氏に仕え、畿内に進出した三好氏。三好元長は「堺幕府」の立役者となり、三好長慶は有能な弟たちや重臣松永久秀と覇業に邁進し、主家を凌ぐ勢力となる。やがて足利將軍家の權威に拠らない政権を樹立し、最初の「天下人」と評された。政権崩壊後も、織田信長の子や羽柴秀吉の甥を養子に迎えるなど名門としての存在感は保たれ、その血脈は江戸時代に旗本として存続する。信長に先駆けて天下に号令した一族の軌跡。

